

# 史遊会通信

No.227号  
平成26年  
1月15日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

## 十一月討論会「勝海舟と福澤諭吉」要旨

### 「痩せ我慢の説」は是か非か

司会 平山善之

司会 今月は討論会で、海舟と諭吉について皆さんに議論して頂きますが、論点を絞り、明治二十四年に諭吉が海舟と榎本を非難して書いた「痩せ我慢の説」は是か非か、を討論します。本説は九月例会で配布済みです。

始めに、告発した側、諭吉の代理人中山さんに冒頭陳述をお願いします。

諭吉側 中山喬央氏 諭吉は、痩せ我慢の精神が無ければ、我国の独立は維持できないと考えた。この説は、直接には勝海舟と榎本武揚の幕臣としての出処進退を問題にしたものだ。海舟は戊辰戦争の際、国内平和を優先し

自らイニシアティブを取り幕府消滅を実現させた。諭吉は、その成果を評価しても、維新後薩長の人々と共に「名利の地位」についてことは容認できない、とした。

国の利益名誉への固執、忠君愛国も私情だが、諭吉は忠君愛国を、世界の事情を考えればやはり美德と考えた。彼は三回渡航し、海外事情に実によく通暁していた。故に、国やその属する共同体が危機や滅亡に瀕した場合たとえ勝算に乏しくても命を犠牲にしても護りぬく、これこそ痩せ我慢だとする。特に

### 例会のお知らせ

#### ◎ 一月総会

日時 平成二十六年一月二十二日(水)

午後六時～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

総会後に講演 小田紘一郎氏

テーマ「文学・音楽等雑話」源氏物語と

平家物語と井上靖およびワグナー

二月号自由執筆 漆原直子、平山善之、

鯨游海の諸氏 締切一月末

#### ◎ 二月例会

日時 平成二十六年二月二十六日(水)

午後六時～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 鯨游海氏

テーマ 政治家の一詩を巡る春蘭と秋菊

三月号自由執筆 三戸岡道夫、隆恵、

小田紘一郎の諸氏 締切二月末

弱者が強者に対して弱者の地位を保つにはこ

の、瘦せ我慢しかない、という。諭吉はこの瘦せ我慢のモデルを三河武士の精神にあつたと考え、海舟の戊辰戦争期の行動は、日本武士の気風を損なつたと結論付ける。瘦せ我慢は国民を基盤とする国民国家を樹立する為に、国民レベルで發揮されることが必須なのに、海舟の行動はマイナスになりかねない。

**司会** この非難に対する、海舟の答弁を諸橋さん、お願いします。

**海舟側 諸橋奏氏** 学者、評論家と政治家では立場が全く違う。学者は理屈が多い。勇ましい、恰好いいことを言う。発表したのも海舟死後、三国干渉で熱中しやすい日本国民が沸騰している時に、タイミングよく勇ましいことを言った。

新政府後、名物の地位にいたと言うが、西郷や大久保が、静岡に隠遁していたところへ再三再四、頼みにきたのだ。考えれば海外のことなど何も知らぬこの連中に任せておいては日本が危ない、と思つたまでだ。

また、徳川家臣団を路頭に迷わせてはならぬ。將軍への責任、家臣への責任、国家の行く末を見定め、老獪な欧米諸国にやられないようにする義務、それらから已む無く新政府

に協力したまでだ。

諭吉は將軍に、外国勢力を借りても長州を叩き壊せと具申している。彼は欧米の老獪さを理解していない青二才だ。江戸無血開城は、海舟の知識と知恵を見込んで慶喜が慶応四年一月、全権を委任するというから決心した。海舟が変わつたのは、長崎で諸藩の若者と共に暮らし、咸臨丸で渡米して、西洋との格差を知り、これからは能力主義でいくしかない、と感じてからだ。腰抜けの解決と言われようとも、何も言わない。諭吉は個人的に合わないから、嫌っていたから、色々言うのだ。

**中山** 諭吉は將軍に直接意見具申するほど大物ではなかった。中津藩の下級武士だ。

**諸橋** 彼は西周を通じてやっている。

**司会** 議論を整理すると、諭吉の海舟非難は

#### ① 江戸無血開城

#### ② 新政府に仕えた

の二点のようです。まず①の平和主義。瘦せ我慢しなかったのは、勝算無くても戦うべきところ戦わなかったのは国民精神作興のうえからは、大変好ましくない、ということだが、海舟にかわり蘇峰が反論し、戦争は諸外国が付け込む因となつたらうと論じた。諭吉はす

ぐ、弟子をして反論させ、当時の諸外国は日本を乗っ取るうという意図も余裕もなかった、海舟の言い逃れだとなりました。この点はどうでしょう。

**諸橋** 当時仏公使ロシュは慶喜に援助するから戦えといい、英公使パークスは無傷のまま日本を手中にしようとした。海舟の最大の課題は列強の代理戦争をしてはならない、ということにあった。英仏の代理戦争になる可能性は確かにあつた。

**司会** 外国脅威論をめぐって活発な討論参加を求めます。戦争してたらどうなつたか、推測しかできませんがご自由に発言を。

**中山** それについて諭吉も書いているが、公使連中はいろいろなのがいたが、本国から見れば瘦せこけた日本より中国のほうが遙かに魅力だった。幕府を脅かして利権だけとればよい、入り込んでどうこうする気はなかった。

**諸橋** 諭吉はその程度にしかみていなかった。西を通じて家茂に、フランスの力を借りて長州をやつつけて徳川首班政府を作れといった。**司会** 諭吉は佐幕論者ですか？

**中山** いや、佐幕というわけではないが攘夷論者から暗殺されることを恐れていた。暗殺と借金が大嫌いだつた。

**諸橋** 彼は明治十一年、慶応義塾が生徒減少したとき海舟に借金を申し込み手痛く断られている。まず私財を投げ出せ、と。

**中山** 義塾経営は確かに行き詰ったが、甥で三井の中心に居た中上川などの尽力で、月謝だけに頼らず寄付を募って凌いだ。

**諸橋** 海舟が諭吉を評して「金儲けが好きな男」など言ったから諭吉は怒った。

**司会** 外国脅威論に戻りましょう。戦争していたら諸外国から借金をしたでしょうし、後々まで首根っこをおさえられたのでは？

**中山** ナポレオンの対露戦役の時、ロシアはモスクワを焦土とした。我々も昭和二十年全国を焦土として、そこから立ち上がった。

借金もせず、立派に復興した。日本人はそういう民族で諭吉はそれを信じていた。

**三戸岡** 慶応から明治になる頃、諭吉は何をしたか。何もしていないではないか。英仏には大きな戦略があった。日本を守ったのはやはり海舟だ。

**諸橋** 海舟が首尾一貫守ったのは諸外国に隙を見せない、ということだった。徳川や家臣のことは、後で考えればよい。列強の犬にはならない、これだけを命をかけて守った。

**中山** 諭吉は人材を育てた。

**三戸岡** それは明治以降。維新前は何もしていない。

**司会** 諭吉は中津藩士、譜代藩士として徳川中心の政府を思考したのは事実のようですね。  
**中山** だから、命も狙われたし、昨今は評判悪い。

**三戸岡** 幕末に命をかけて国を守ろうとしたのは海舟で、比較にならない。

**司会** 確かに年齢も違い、又、かたや言論かたや政治と活躍分野も違うので比較は難しいと思います。

では次に②の問題、明治以降ですが、海舟は二君に仕えたのでしょうか？

**諸橋** 日本国の明日を考えている時にそんなことを言っている国はできない。言っている人は救いようが無い。

**中山** 明治以後国を興した企業、三井銀行、日本郵船、横浜正金、これ等の主要幹部はみな慶応義塾出身者だ。貢献している。

**諸橋** 武楊だが、当時国際法を知っていたのはオランダがえりの彼くらい。こういう人材を活用すべしと黒田らが命乞いして、箱館後間もなく対露交渉に当たさせた。松本良順も土方が「君は生きて働け」と言ったので後に軍医総監にまでなった。歴代東大総長も賊側

が多い。

**司会** 洋学を学んだ、数少ない人材は活用すべきではなかったでしょうか？

**中山** 武楊については諭吉も影ながら助命に尽力した。

**司会** 惜しいと思ったからでしょう。ただ山野に引つ込めというのは、首切るも同じじゃないですか？

**中山** 海舟は正二位という高位にいたが諭吉は無位無官で大変なシンクタンクを作った。武楊だって同じことはできたはずだ。

**三戸岡** 明治政府は人材不足で、人材は賊側に多かった。諭吉は六十歳ぐらいになって、つまり儲けちゃってからこれを書いている。

**中山** 憂国の至情だと思う。

**三戸岡** 憂国というのが何もやってない。

**諸橋** 痩せ我慢の説は諭吉の嫉妬だ。女偏だ。

**中山** それは人格を貶めるものだ。

**高橋** 諭吉の人格はどうか？誠実か嘘つきか。

慶応義塾の一万二千坪の土地の入手経緯も不明朗と聞く。

**中山** 合法的に入手した。いち早く情報を手に入れただけ。

**三戸岡** それには政界とのコンタクトが必要。教育産業を商売とみれば、商売がうまくいった

ということだ。

**司会** 諭吉は三回目の海外渡航の際、幕府の公金を自己のために使って、帰国後謹慎処分にも遭っています。また翻訳方であったが、少しも役に立たなかったと、当時の団長小野友五郎が言っています。

**諸橋** 海舟も咸臨丸のときはいろいろあった。  
**中山** 私は日露戦争は、言い方悪いがうまくいったと思う。二〇三高地に突っ込んでいく兵を、国のために役だつ国民を造った。これこそ痩せ我慢だ。

**司会** その精神論が昭和二〇年につながったという説もあります。

**諸橋** 善し悪しは別に戦中の、小国が大国と戦う大儀名文論にはなった。

**太田** 二人の対比表を作ってきたので見て欲しい。結論をいえば諭吉は教育者。海舟は政治家。二人を同じ土俵で論ずるのは難しい。  
**司会** 仰る通りと思います。それで今日は論点を「痩せ我慢の説」に絞り、これの是非を論ずることにしたわけです。

この「痩せ我慢の説」を書いたことで諭吉は男を上げた、と思う人？(挙手中山氏のみ)では、男を下げた、書いたことは妥当ではない、と思う人？(ほぼ全員挙手)

**中山** 中山は断固反対だということは記録しておいてもらいたい。

**司会** この辺で、皆さんお一人づつご意見を。  
**三戸岡** 海舟は慶喜の身代わりだったと思う。慶喜は自由に動けない分、代わって動くものが必要だった。だから海舟は実に多彩な動きをしている。異例の出世をしているのもその為だ。

**太田** 海舟は大人物。栄達のためとか、支配意欲で働いていない。明治政府をコントロールする役割を果たした。

**長島** 田中正造の足尾銅山事件で、諭吉は銅生産を優先し農民の陳情を鎮圧しろと言った。  
**村上** スケールの違いを感じる。諭吉は学者で徳川幕府あるを知って日本あるを知らなかった、人間としてのスケールの差だ。

**神津** 中公新書に福澤諭吉と中江兆民を書いたのがある。同じ年に二人亡くなっているが私は兆民に親近感を持つ。脱亜ではない。当時はそうだが。日清戦争後、償金で日本経済の基をつくったのは承知しているが、富国強

兵、必ずしも強兵なんだろうか？諭吉とは、そんなに優れた人かなと疑う。

**笹森** 海舟は江戸で、諭吉は中津で育った。その違いが二人の違いと思う。

**柴田** 二人は見る世界が大分違う。中国、朝鮮などに対する見方で、今から見れば海舟がいかにも優れていたかわかる。

**鯨** 疾風怒濤の時代によくぞこんな凄いやつが、特に海舟だが、居てくれた。今日は諭吉劣勢だが永い目で見ると諭吉の功績も大きい。大阪大学も彼が作った。

**千坂** 批判するなら対案を出すべき。無いのに批判すべきではない。代案出したとしても実践してない。やった人を批判すべきではない。中津藩は鳥羽伏見で寝返った。海舟は全部終ってから、新政府に仕えた。全く違う。  
**漆原** 足尾の事や、征韓論、脱亜入欧論などから見ると、諭吉は列強に早く追いつきたくて頑張ったのかなと思う。

**新井** 諭吉は学者、評論家と言われるが私はジャーナリストと思う。西南戦争のとき、西郷を擁護したのはジャーナリストの立場、諭吉の本質だ。自分もジャーナリストになったかった。諭吉はある時期からおかしくなったと自分は思う。

**司会** では時間が来ましたのでこの辺で。皆さんありがとうございました。

自由執筆

花薬（かずい）夫人

森下征二

福島県二本松の霞ヶ城公園の東側入口に、巨大な花崗岩の自然石が座っている。古くから戒石銘と呼ばれているもので、丹羽家七代の高寛公の儒学者・岩井田昨非の献策により、藩士の戒めとするため、次の四句十六文字が刻まれている。

爾俸爾禄

爾の俸 爾の禄

民膏民脂

民膏 民脂なり

下民易虐

下民 虐げ易く

上天難欺

上天 欺き難し

この戒石銘の原典は、中国の五代時代（十世紀の前中半）の辺境の小国、後蜀国の最後の君主であった孟昶の、二十四句九十六文字の辞である。その中から特に、官吏を戒めるため有効なこの四句を、宋の太祖・趙匡胤（「十国春秋」所載。通説では、趙匡胤の弟、太宗・趙匡義だとされる）が摘み取り、戒石

銘として天下郡県の役所に置いた。それに倣って日本でも、岩井田が二本松城に戒石銘を置いたと言う訳である。

ところで、この戒石銘の原典を作った孟昶とは、一体どんな君主だったのか？ 亡国の君主であったせいも、極めて評判が悪い男だった。戒石銘の原典を作ったにしては、贅沢意外に能がなく、政治に倦んだ一大不肖児だとされている。どんな贅沢をしたか？ 良く挙げられるのが、七宝製の便器を作り、愛用したことである。夏桀とか殷紂と言った、史上名高い暴君と比べると、何と慎ましいものではないか。

さて、花薬夫人に話題を移そう。彼女は孟昶の治世三十一年間の内、（孟昶が未だ青年君主の頃から、宋に降伏して、宋の都・汴京に旅立つまでの）二十七年もの長い間、孟昶の寵愛を独占した。おそらく、絶世の美女であったのだろう。当時、有数の詞人（詩人ではない。念のため）でもあった孟昶は、「玉樓春」の詞で、彼女の艶やかさを次のように詠った。

冰肌玉骨清無汗

冰肌玉骨、清くして汗無く

水殿風来暗香滿

水殿 風来つて暗香滿つ

繡簾明月独窺人 簾を繡けば、明月独り人を窺い

欹枕釵横雲鬢乱 枕欹ち、釵横に雲鬢乱る

起来瓊戸啓無声 起来して 瓊戸啓くも声無

時見疎星渡河漢 時に、疎星の河漢（銀河）を渡るを見る

屈指西風幾時来 指を屈む、西風 幾時来るか

只恐流年暗中換 只恐る、年流れ 暗中に換りゆくを

冰の肌玉の骨、釵横に雲鬢乱る…。冷たい肌の持ち主の花薬夫人が、釵を横へずらし、黒髪を振り乱して寝乱れる姿に、孟昶は虜になったのだろうか？

しかし、彼女の魅力はそれだけではなかった。彼女もまた、当時有数の詞人であり、詩人でもあったのだ。それは後蜀の滅亡後、はしなくも現れてくる。

西暦九六五年、宋は遂に後蜀を平定する。

花薬夫人は孟昶に従って宋都・汴京に入ったが、幾許もなく孟昶が殺害され、宋の太祖の

後宮に入れられてしまった。太祖もまた、夫人の色香に溺れたのは言うまでもない。

ある時、太祖が花薬夫人に後蜀滅亡の原因を聞いた。その時、夫人が詩に託して次のように答えた。

君王城上豎降旗 君王 城上に降旗を豎つ

妾在深宮那得知 妾は深宮に在りて那んぞ

知るを得ん

十四万人齊解甲 十四万人、齊しく甲を解く

更亦無一個男兒 更に亦た一個の男兒無し

後蜀が滅んだ時、宋軍は僅か三万人に対し、未だ精兵が十四万人も残っていた。兵士は一体、何のために飽食したのか？ 後蜀が滅んだ原因は、孟昶一人の責任ではなかったかもしれない。

果たせるかな。資料を詳細に見ると、孟昶はさして暗君であったようには見えない。その証拠に、花薬夫人を孟昶から取り上げた宋の太祖が、孟昶の作った辞の中から、敢えて戒石の句を選んだではないか。

さて、二本松と同じ福島県の、会津城落城

の時のことである。開城前夜、籠城していた一人の婦人が城壁に現れ、女文字で漢詩を壁に刻み込んだと伝えられている。その漢詩こそ、何あろう。花薬夫人のこの時の詩の、上二句であったと言う。

君王城上豎降旗 君王、城上に降旗を豎つ

妾在深宮那得知 妾は深宮に在りて那んぞ

知るを得ん

会津も、そして二本松も、共に奥羽列藩同盟の構成藩であった。白虎隊と二本松少年隊など、この二つの藩には、共通する点が数多くあった。彼らは孟昶の故事でも、戒石銘と花薬夫人の詩を通じ、固く繋がっていたのである。

ところで、会津落城前夜、花薬夫人の詩を城壁に残した女性は、一体誰だったのだろうか？ その名を記した資料は、どこにも残っていないようだ。

自由執筆

### 出雲大社再考(三)

出雲大社教と出雲教

村上 邦治

現在出雲大社に関して、出雲大社教（いずもおおやしろきょう）と出雲教という、二つの似通った宗教法人が存在している。両法人は、いづれも「出雲大社敬神講」から派生したもので、出雲国造家の分立と、明治初期神社改革によるものである。

明治四年、維新政府は、神社を「国家の宗祀」とし、国家管理に移すとともに、官司は、世襲を廃止して任命制とする、神社改革を実施した。これにより、出雲大社は、官幣大社という最高の社格を得たが、大社自体が信者を増やすなどの宗教活動は、行えなくなった。また、国造家分立後江戸幕末まで、相互に大社の祭祀を務めてきた北島、千家両家は、この改革により、並び立たず、明治五年、大宮司に千家尊福、少宮司に北島脩孝が任命された。この年、尊福は、大教正・神道西部管長に就き、神道界の若き指導者として、目覚ましい活動を始めていた。

神社の宗教活動停止に伴い、これまで、大社の信徒拡大、参拝者の募集・世話、遷宮寄付、などに大きな役割を果たしてきた、出雲御師の活動は、行うことができなくなった。また、御師により、各地に結集されていた甲子講や出雲講の維持が、危惧されたため、千家・北島両家にて、これら信仰団体を結集させて、明治六年、新たに「出雲大社敬神講」を結成したのである。この講により、従来の御師活動を維持するとともに、布教拡大に乗り出したのである。

同年三月、北島脩孝少宮司は、岡山県吉備津神社宮司に発令される。出雲国造である脩孝は、これに従わず、赴任を拒否して出雲に留まった。しかし、北島家は、もはや大社祭祀には、関われなくなってしまった。その為この時期、北島家と大社との結びつきは、「敬神講」しかなかったのである。出雲国造本家を自負する、北島家の「敬神講」への思いは、計り知れないものであった。

ところが同年九月、尊福は、大社内にあつた「敬神講」教院を、千家国造館に移し、「出雲大社教会」に改組したのである。事前の相談もなく、突然のことに、北島家は驚いた。急遽、北島国造館内に「出雲教会」を組成して、これに対抗したのである。大社祭祀から

外され、「敬神講」からも遠ざけられた脩孝は必死の思いであったであろう。

既に、神道界の要職にあり、日本神道及び出雲大社の将来を考えていた尊福にとっては、両家の争いごとは、小さな問題に他ならなかった。

神道界を二分した祭神論争を経て、明治五年、「神官は教導職の兼補を廃す」とした神官教導職分離令を契機に、尊福は、政府の任命する神官を離れ、独自の活動を行うため、出雲大社宮司、出雲国造職を、弟（八一代尊紀）に譲った。そして「出雲大社教会」を改称して、「神道大社教」とし、政府より一派特立の認可を受け、神道の全国普及と大社（大国主命の神徳・精神）の信徒拡大に専念したのである。尊福の活動は目覚ましく、公認された神道一三派の最大勢力に成長した。一方、北島家の「出雲教会」は、明治一五年「出雲北島教会」、翌年「神道出雲教会」、昭和一七年「神道大教出雲教会」と改称した。戦後宗教法人法により、宗教法人「出雲教」に改称、今日に至っている。

千家家の「神道大社教」は、戦後、神社の国家管理が廃止されるに伴い、「出雲大社教」（いずもおおやしるきょう）と改称し、以前と同様、出雲大社を宗祠とする組織に変更、今日に

至っている。

明治以降、主要神道十三派の代表格であった同教は、現在でも、最高の信徒を保持し、日本を代表する神社として、多くの参拝者を集める出雲大社の名声拡大と一体となり、その存在感を誇っている。

北島家が起こした「出雲教」は、結局、全国に一派として広げることができず、地域内の活動にとどまった。

この両教の存在は、南北朝期出雲国造家の分立を、思い起こさせるものであるが、縁結びの神として、良縁を求め訪れる出雲大社参拝客には、無関心の出来事のようなのである。

#### 参考文献

『出雲大社』 千家尊統 学生社  
『北島国造家沿革要録』 出雲教

自由執筆

## 会田安明について

佐藤 健一

江戸時代の初めは、どの文化でもいえることであるが、関西が数学の中心であった。江戸時代に成る前の数学が江戸時代になっても京都を中心として行われていたからである。

その数学の担い手は五山の僧や金貸しの土倉たちにより数学は学ばれていた。内容は『算用記』や『割算書』の数学である。優れていた人はもう少しレベルの高い開平や開立の計算も出来ていた。十七世紀の半ばでは江戸の数学も盛んになり、磯村吉徳や村松茂清などにより関西に匹敵するレベルになり、関孝和の出現により、大いに栄えた。関には優れた弟子が何人もいて、そのリーダーを宗統といい、宗統が関流のリーダーとして全国にいる関流の人を束ねた。天明年間、関流で最も実力のあった藤田定資に対抗した人に会田安明がいる。

会田安明は現代の山形市七日町で一七四七年に生れた。九歳のころ父親から知恵の環の「九輪環」を貰った。安明はその夜眠らずに考えて、その外し方を見付けたと言われている。このことを父親が知りその才能に驚いた。十五歳のころ近所の子供たちの間で「博打」が流行り、安明も一緒になって遊んだところ父親から注意を受けた。

「お前は近頃ばくちをやっているようだが、このようなことを仕事にしている人もいて家財を失った人もいる。このような良くない楽しみはやめることだ。お前は九歳のとき一夜にして知恵の環の解き方を考え付いたほど、世の中では秀でていて才能を持っている。善悪をよく考えてみよ。」安明はいつもは注意もしない父親が自分を見守っている事を知った。数学をこの町では有名な岡崎権兵衛安之の学び、まもなく師の知っている全てを知った。岡崎は安明に「私は幼い頃に数学を学んだが、頭が悪いためなかなか理解出来なかった。そのため神様に大願をかけたところ間もなく理解出来るようになった。その大願というのはねぎを食べないことだ」と言った。それを聞いた安明も「自分も数学で天下に名を挙げようと思う。よってねぎを食べないことを誓う」といい、文殊菩薩に行き、大願をかけた、という。

二十三歳のとき江戸に出て来た。生活するために職を得なければならぬ。旗本になるため旗本の鈴木清左衛門の養子になり、旗本の鈴木安且と名乗って、幕府の御普請役になった。利根川などの改修工事を担当した。

しかし、川除のため各地に出張が多く研究はほとんど不可能であった。十代將軍の徳川家治の死去に伴う御代替のため、一七八七年(天明七年)に浪人すると、もとの会田安明にも

どった。このとき四十一歳である。この十二年間に儉約しお金もたまっていたので、日夜数学の研究に没頭し、三十五歳のころに仕事にも余裕が出来て研究する時間も増え、天明元年の二月愛宕山に算額を奉納した。この算額の問題は四次方程式の問題で、これを算木を使うのではなく加減乗除だけで解くいわゆる「女の子算」で解くことをねらっている。

江戸には『精要算法』を天明元年に著し最も有名な数学者の藤田定資がいた。安明は藤田に入門しようとしたが、安明が愛宕山へ揚げた算額の訂正を条件にしたことに憤慨して入門することを断念した。安明の算額には表上上のミスがあったから藤田定資に指摘されたのである。安明からすれば『精要算法』にでも小さなミスはあるはず、と考え藤田に勝つて日本一になることを新たな目標とした。そのため『精要算法』を徹底的に研究した。まもなく『精要算法』のミスとも考えられるところを見付け非難した本を書いた。これが発端となって藤田との論争は始まった。結局藤田が亡くなるまで続いた。この論争を続けるためにも安明は研究を重ね、優れた数学者になつていくが、藤田に対しては感謝していることを書き残している。ついに藤田の『精要算法』をしのぐ名著『算法天生法指南』を文化七年安明六十七歳で著した。



自由執筆

## 中山道旧板橋宿歴史散策

—幕末・維新の三題雑感—

諸橋 奏

徳川家康(一五四二〜一六一六)は、開府の一六〇三年(慶長八)に先立つ一六〇一年、軍事対応並びに政治目的から五街道の整備に着手した。日本橋を基点として、一定間隔ごとに宿場も設置された。最初に東海道、次に日光街道、三番目に奥州街道、四番目が古代からの東山道とうざんを整備した中山道で、その完成は一六九四年(元禄七)、全長約五四〇キロメートル、宿場数六十九。日本橋から第一の宿場が板橋宿で平尾宿・中宿・上宿に三分され、長さは約一・七キロメートル、三宿合せて本陣一・脇本陣三・旅籠四十五軒であった。

一、近藤勇いさみ・土方歳三いさみ之墓と松本順

旧板橋宿入口、現JR板橋駅東口に「新選組局長近藤勇昌宜・土方歳三義豊之墓と隊士供養塔」がある。近藤(一八三四〜六八)は慶

応四年、官軍に捕えられてここ板橋で斬首処刑され、土方(一八三五〜六九)は明治二年箱館五稜郭で戦死した。(戊辰戦争終結)。

この墓碑は明治九年、隊士の一人永倉新八(本名長倉)が発起人となり、旧幕府の御典医であった松本順の協力を得て、造立された。

松本順(一八三二〜一九〇七)は幕末・明治の著名な医師で、幕府と新政府両方の要人をつとめた。幕府では奥医師・西洋医学所頭取・海陸軍医総長を、新政府では軍医監・初代軍医総監、後には貴族院議員・男爵になった人物である。その松本と新選組の取合せは一見奇異であるが、因縁があった。松本の人柄に心酔し「義兄弟になりたい」という近藤の申出を快諾し、これを機に松本は新選組の面倒見を惜しまなかった。更には戊辰戦争では幕府軍軍医として転戦、最後の仙台に至った時、土方に「勝算のない戦い、君は前途有用な人、ここより江戸へ帰れ」と助言されて松本は横浜へ戻った。松本は土方を恩人と感じていたのであろう。

ところで、松本順は日本の予防医学の先覚者としても知られている。幕府が長崎に設立した「海軍伝習所」に軍医として入所の折、

オランダの軍医ポンペ(一八二九〜一九〇八)に学んだものである。日本人がなすべき健康法として「牛乳の飲用と海水浴」を推奨した。明治三年、東京で最初の「牛乳搾取業」(牛乳販売店)をはじめた元旗本の阪川當晴は松本の伯父であったし、日本最初の海水浴場が明治十八年、大磯に開設されたのも松本の尽力によるものである。

一、加賀藩下屋敷と由利公正よしみまさ

参勤交代制度で、江戸に大名とその家族・家臣一統が集まることとなり、諸大名に將軍から屋敷が下賜された。

加賀藩前田家(百二万五千石)の場合、一六七九年(延宝七)、四代將軍家綱から五代藩主綱紀に板橋宿平尾六万坪を賜った。藩は一六八三年(天和三)、ここ別邸(平尾邸)を下屋敷(別荘)とした。その後敷地は二十一万七千坪となり、中に石神井川が流れ、池泉回遊式庭園(金沢兼六園の約七倍)が造られた。維新後の明治九年、下屋敷跡地(現加賀町一帯)に由利公正が牧場を開いた。由利は消費地都市部での「牛乳搾取業」(乳牛飼育)は衛生上問題があるとして「下板橋宿金沢藩上地の内開墾

地を除く外当分拝借」を申し出て府から約十  
万坪を借用し、乳牛牧場にした。この由利牧  
場を見習い石神井川流域には多くの牧場が出  
来、昭和五十年頃まで続いていた。

由利公正(一八二九〜一九〇九)は福井藩士。  
藩主松平春岳(松平慶永よしながの号、一八二八〜九  
〇)を支えた人で、明治四年、京橋木挽町で牛  
乳搾取業をはじめた酪農乳業の先駆者の一人  
である。また東京府知事として火災に強い銀  
座の礎を築いたことでも知られ、明治政府の  
参与となつて財政をつかさどつた他さまざま  
な分野で活躍した。子爵。

一、皇女和宮の下向と板橋宿での献立  
和宮(一八四六〜七七)は仁孝天皇の第八皇  
女で孝明天皇の妹、幕末の外圧下、公武合体  
のため、一八六二年(文久二)十四代將軍家茂いえもち  
(一八四六〜六六)に降嫁した。花嫁行列は一  
八六一年(文久元)十月二十日朝に京都を出発  
した。警固十二藩の武士など約八千人・馬三  
百頭、「この世はじまつて以来の大行列」であ  
つたと記されている。

一行は江戸入府前日の十一月十四日板橋宿  
中宿脇本陣(名主飯田本家Ⅱ現飯田侃家)に宿

泊した。たまたま平成九年に飯田家古文書(板  
橋区登録有形文化財)多数が発見され、その中  
に和宮宿泊当日と翌日の献立書も含まれてい  
た。「御間ノ物用・御夜食用・明朝御膳用・御  
弁当用・御次献立」などである。和宮下向最  
後の食事であつた十一月十五日の「御弁当用」  
献立を列記すると

- 一、鯛(目下老尺二寸)二枚 一、同(同尺)
- 老枚(大) 一、鱸(六十目程)七本 一、諸
- 子(大)百疋 一、烏賊(六寸)拾盃 一、蠣
- 老升 一、玉子 六十一、房大根 三房
- 一、若め(大)式把 一、小梅干 百 一、
- 黄芋(大)七本 一、河茸(大)三拾本 一、松
- 露 百 一、菓子昆布 五枚 一、粒椎茸
- 六合 一、紅はしかみ 拾本 一、菜 四
- 百目 一、栗(大)五ツ 一、酢 老斗 一、
- 木割 式枚 一、花瓜 式本 一、糠漬大
- 根 老本

右御膳所入用品々

の如くで、牛乳・乳製品類は皆無である。

日本人がはじめて牛乳を知つたのは六世紀  
中葉で欽明天皇のとき、百濟からである。ま  
た牛乳を最初に飲用した人は孝徳天皇で、大  
化の改新(六四五年)頃であつたと伝承されて

いる。飛鳥時代のことである。爾来、奈良・  
平安時代は、朝廷や貴族社会では牛乳や乳製  
品「酥」などが食されたが、平安末期の戦乱  
以降、乳食の文化は消滅していった。

日本に牛乳利用の食文化が再興するのは幕  
末・明治維新からであつた。

徳川將軍家は一七九二年(寛政四)に安房嶺  
岡(現千葉県丸山町)の所領牧場から白牛を江  
戸雉子橋外(現竹橋)御厩に移した。將軍家で  
は八代吉宗の時から牛乳を飲用していたとい  
う。朝廷ではこの風は途絶えていたが將軍家  
に嫁した和宮は牛乳を飲用したと思われる。  
幕末の江戸城大奥に奉仕していた老女が後日、  
阪川牛乳店の番頭に語つたという和宮につい  
ての逸話にそれとなく窺うことができる。ま  
た朝廷では明治四年の新聞に「(明治)天皇は  
毎日二回ずつ牛乳を飲まれる」旨の記事が掲  
載されたという。新政府挙げての文明開化の  
先兵、酪農乳業発展への期待と振興努力が偲  
ばれるのである。

お知らせ

一月の講演要旨 小田紘一郎

文学・音楽等雑話

— 源氏物語と平家物語と

井上靖およびワグナー—

過去二回は、源氏物語、奥の細道についてしゃべったが、今回は表題にあるような内容での雑談である。読み続けている「源氏物語」は如何なるものであるかを考えるに際し、別の視点、副題にあるような諸作品と比較することは有効な事である。

このことは歴史をも考えることでもあると思われる。これらに共通する事項(テーマ)、例えば、権力と人間、愛、死、人間造型等について整理しつつ同じ点と相違点等について考え、お話ししたい。

又、なるべく多くの時間を質疑に当てたい。

(25・12・18)

※ 新入会員紹介

諸橋奏氏

生年 昭和7年1月

住所 174-0072 板橋区南常盤台二の二七

の二三〇七

電話 〇三・五九六五・二六七一

興味あるテーマ 古代オリエントの食物史

旧約聖書の食物、古代の日本海文化

(ご承知のように、永年友の会会員として

既に十一件の小論・エッセイを史遊会通

信に投稿・掲載されています)

▼ 高橋正彦氏

生年 昭和19年・目黒区上目黒出身

住所 350-0811 川崎市小堤八九九の五五

電話 〇四九・二二二一・六五五一

メール hikozya@hotmail.com

著書 大和朝発生期における暦帝紀と紀年法

視点 現状の科学キャリアシステムは機能

していない事を下記3点、斬新的事実発掘

により世に示そうと考えます。

① 巨大古墳の平面は磁針方位と幾何学よ

り企画されている。

② 鉛同位体問題には論議されない重要視

点がある

③ 炭素年代の基礎である年輪年代には欠陥がある

近日③に関し、「科学論文におけるデータの信憑性」との論題を述べますが、温暖化問題の扱い等を含め、皆様の関心を追々に喚起申し上げたく存じます。

平成二十六年一月の会員及び役員

- |        |        |
|--------|--------|
| ◎新井 宏  | 漆原 直子  |
| 太田 精一  | 小田 紘一郎 |
| ○鯨 游海  | 佐藤 健一  |
| 柴田 弘武  | 高橋 正彦  |
| 瀧澤 中   | ◎千坂 精一 |
| 中込 勝則  | 中山 喬央  |
| 鍋屋 次郎  | ○平山 善之 |
| ◎三戸岡道夫 | ○村上 邦治 |
| 森下 征二  | 諸橋 奏   |
| 隆 恵    |        |
| ◎ 顧問   | ○ 幹事   |

今月から会場が変わります  
お間違いないように

会場 千代田区立日比谷図書文化館  
四階セミナールーム

新会場の交通アクセス

- 東京メトロ丸の内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関駅」C3（※C4出口工事中）・B2出口より徒歩約五分
- 都営地下鉄 三田線「内幸町駅」A7出口より徒歩約三分
- 東京メトロ 千代田線・日比谷線「日比谷駅」A14出口より徒歩約七分
- JR 新橋駅 日比谷口より 徒歩約十分

